愛知淑徳大学
全学日本語教育部門
広報誌

あっと@JL

全学日本語教育通信

第3号 2012年9月30日発行

@JLとは？

全学日本語教育部門は、学生の日本語運用力（Japanese Literacy）向上をサポートする組織です。ここから、学内における日本語運用力向上にむけたさまざまな取り組みを広く発信したいという気持ちを、“@”に込めました。

特集 キャンパスライフと日本語運用力

―受講アンケートの結果から―

大学生になると学修・生活環境における行動範囲・思考領域が急激に拡大・深化します。したがって、大学生活では、複雑な思考を言語化したり、状況や相手に応じたコミュニケーションを図ったりするための高度な日本語運用力が欠かせません。

そのため、愛知淑徳大学では、段階別・分野別に複数の「日本語表現」科目を設置し、このうちの〈基礎〉にあたる「日本語表現T1」（以下、本科目）を１年前期に全学必修科目として開講しています。

本科目では、３本の小論文作成（→解説１）を通して、大学生に必要な文章表現力および論理的思考力を修得します。本科目で実施した「受講アンケート」（→解説２）の結果からは、学生たちがキャンパスライフの様々な場面で日本語運用力の必要性に気づき、実践的な日本語力を学修内容と関連づけて体得しようとする様子が浮かび上がってきました。

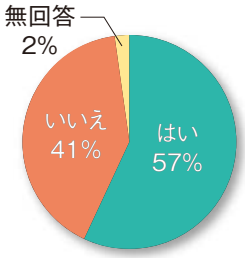
【解説１】小論文作成の３ステップ

① グループで意見交換（ブレインストーミング）をおこない、論文の材料を集める。
② アウトラインを考え、草稿を執筆する。
③ 受講生同士で草稿を添削し、指摘に基づいて完成稿を作成する。

【解説２】受講アンケート概要

調査期間：2011年度「日本語表現T1」講義最終日（前期開講クラス：2011年7月、後期開講クラス：2012年1月）
調査対象：同科目受講生全員（2,148名）
調査方法：無記名、選択・記述併用式
調査内容：学修内容の学内外における活用の度合いについて

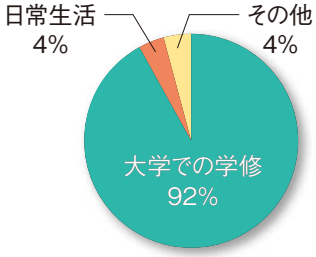
①本科目の開講期間中に、その学修内容が他の場面で役に立ちましたか？



約6割が「役に立った」と回答

約６割の学生が本科目の開講期間中に、その学修内容が他の場面で役に立ったという経験を得ていました。本科目で学ぶ文章構成の方法を他の授業でも使用するなど、学生は、学修内容を実地に活かそうと意識していることがうかがえます。

②本科目の学修内容はどのような場面で役に立ちましたか？



9割強が「大学での学修」に役に立つと回答

９割を超える学生が「大学での学修」と回答し、本科目が大学の学びに欠かせないスキル獲得の重要な機会となっていることが分かります。

では、具体的にどのような場面で役に立ったのでしょうか。
次ページで学生の声を紹介します。

次ページへ続きます ▶▶▶

学生の声 学業編　英語のレポート作成にも役に立った!

【レポートを作成するとき】

・作成する前に、ブレインストーミングによるアイディアの導出とそれらの関連付けをおこなうようになった。（ビジネス学部１年）

・アウトラインを作成し、全体の構成を決めてから執筆にとりかかる習慣がついた。（福祉貢献学部１年）

【英語で小論文を書くとき】

・人によって解釈の異なる表現を避け、具体的に説明することを学んだので、英語のレポートでもmanyやa lot ofのような表現を用いず、具体的な数字を示すように心掛けた。（交流文化学部１年）

本科目で修得する文章作成や論理的構成の方法を、学問分野や使用言語の別を問うことなく応用していることが分かります。

学生の声 日常編　アルバイト先で文章をほめられた!

【日常生活で】

・新聞記事の文章表現や論理性を意識するようになった。（健康医療科学部１年）

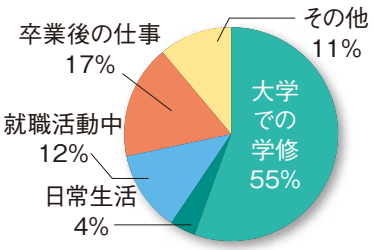
・大勢の前で話す機会があったとき、本科目で学んだ論理展開の方法をふまえて、自分の考えを明確に伝えることができた。（健康医療科学部１年）

【アルバイト先で】

・職場で業務報告書を作成する際、事実報告と所感の区別を意識したところ、文章が上手だとほめられた。（心理学部１年）

本科目で修得した日本語運用スキルを、大学での学修のためだけではなく、日常生活における円滑なコミュニケーションや効果的な自己表現のためにも応用していることがうかがえます。

③今後、どのような場面で本科目の学修内容が役に立つと思いますか？



社会に出てからも役に立ちそう!

約６割の学生が今後の大学生活での活用を想定しています。その一方で、将来に控えている就職活動や卒業後の社会生活においても、この科目の経験が活きるとイメージする学生もいることが分かりました。具体的にその意見を見てみましょう。

学生の声 就職編　職場でも活かせるかも

【就職活動で】

・エントリーシートを作成するとき、話しことばと書きことばとの違いを意識できる。（人間情報学部１年）

・教員採用試験の小論文を書くとき、明確な根拠に基づいた意見を述べることができる。（文学部１年）

【就職後に】

・本科目でおこなった相互添削の作業は、教員になって、生徒の書いた文章を添削する際にも役に立つ。（文学部１年）

・言語聴覚士としてカルテや症例報告などの書類を作るとき、誤解のない説明と報告ができる。（健康医療科学部１年）

就職活動中、あるいは職場で、本科目の学修内容が活かせるというイメージを実際に具体的な形で抱いていることが分かります。

総評　学生たちが、本科目を個別の具体的な状況で役に立てているという実態が見えてきました。今後も本科目で得たことを精力的に実践し、学生たちがよりよいキャンパスライフを送ることを望みます。

ズーム!ズーム!!

「日本語表現」全9科目から毎号1科目ずつを取り上げ、授業の様子を詳しくお伝えします。

第3回 日本語表現B2〈スピーキング〉

（2～4年開講）

「日本語表現B2〈スピーキング〉」は、ビジネスシーンにおける〈話し方〉を学ぶための科目です。15回の実践的な授業を通して、敬語の使い方を含む適切なことばづかいや、状況に応じた効率のよい話し方などが身につきます。今回はそのなかから、就職試験を想定したグループ・ディスカッションの様子をご紹介します。

「日本語表現」科目の全体像

基礎	テクニカルコース	日本語表現T1	第1回
応用	テクニカルコース	日本語表現T2	第2回
発展	アカデミックコース	日本語表現A1〈ライティング〉	
発展	アカデミックコース	日本語表現A2〈スピーキング〉	
発展	アカデミックコース	日本語表現A3〈リーディング〉	
発展	ビジネスコース	日本語表現B1〈ライティング〉	
発展	ビジネスコース	日本語表現B2〈スピーキング〉	今回はこちら
発展	クリエイティブコース	日本語表現C1〈ライティング〉	
発展	クリエイティブコース	日本語表現C2〈スピーキング〉	

ズームアップ! 日本語表現B2 授業の流れ

ここがポイント

STEP 1 今日は、グループ・ディスカッションにおける〈話し方〉を学びます。
テーマは「非常時における人間性の現れ方」。
事前に、関連する文章を読み、その内容をふまえて議論します。

STEP 2 学生は議論をおこなうメンバーと、それを評価するオブザーバーとに分かれます。

STEP 3 議論開始。ほどなく教員から「異なる視点からの問題提起を」とのアドバイスが。

STEP 4 アドバイスにより、新たな意見やユニークな発想が加わり、議論に熱が入ります。

STEP 5 オブザーバーは、ペアを組んだメンバーの言動を評価シートを使ってチェックします。

STEP 6 議論終了。教員が総括をおこないます。「実際の就職試験ではもっと積極的に！」

STEP 7 オブザーバーが先ほどの議論における評価を本人に伝えます。

STEP 8 最後に、実践的な技術の披露も。「自論の主張だけでなく、他者の意見をまとめるのも存在感を示すコツ。」

授業担当者からのメッセージ

全学日本語教育部門　講師（非常勤）
樋口貴子

この授業では、公的な場やビジネスシーンにおいて、論理的に筋道を立てて話すことの重要性を確認し、状況に応じて分かりやすく説得力のある話し方ができるような実践力を高めることを目指しています。どのように話せば聞き手に正しく理解してもらえるかを常に意識することが大切です。

書く書くしかじか…

学生から、教職員から

「日本語表現」科目で学んだこと

交流文化学部3年
浅野芳美

浅野さん(中央)とクラスメート

「日本語表現」科目は、大学生活における学修の基礎となるものである。

基礎科目である「日本語表現T1」では小論文の書き方を学んだ。特に、自分の意見を述べるときには、事実に基づいた客観的な根拠を示さなければならないことを知った。今でも私は、小論文やレポートを書く際に、このことを実践するよう心掛けている。

応用科目である「日本語表現T2」では、「情報を収集するスキル」「発表するスキル」が身についた。前者は発表に必要な情報を効率的に収集する技術、後者は、それらの情報を質量ともに過不足なく、かつ分かりやすくヴィジュアル化し、筋道立てて発表する技術だ。現在、ゼミでのプレゼンテーションなどでこれらの技術を大いに活用している。

そして、現在私は、発展科目である「日本語表現B1」を履修している。この授業ではビジネス文書の作成技術を学ぶ。ここで修得する報告書・お礼状・Eメールなどの文書作成方法は、今後、就職活動や職場だけでなく、日常生活でも大いに役立つだろう。

これからも、「日本語表現」科目で学んだことを様々な場面で活かしていきたい。

大学で「日本語」を教えるということ

ビジネス学部教授
大塚英揮

「僕の売りはコミュニケーション力です！」

自信満々でそう答える若者たち。

耳障りなバイブの音とともに携帯に絶え間なく届く、短文の羅列。

お互いを正当化するために、貧しいボキャブラリーから選ばれた「決まり文句」でつなぐ、無駄のない合理的な「コミュニケーション」。

その心地よさの中で若者は錯覚する。

「俺ってコミュ力あるじゃん。」

自分の想いを相手に伝えることは、実際にはとてもしんどい営みである。

なぜなら想いを伝えるためには、お互いが違う枠組みの中にいることを前提とした上で、相手を思いやり、相手の立場にたって丁寧に言葉をつないでいくことを必要とするからである。

同じ年代の同じ価値観の人たちとしか通じ合えない。見方考え方が全く異なる僕らオヤジ達と一緒に仕事をするようになってはじめて、そのことに気づいても遅すぎる。

大学で「日本語力」を鍛える。それは、若者に自らの「コミュ力の未熟さ」に「気づかせる」大切な営みである。ゼミナールなどの機会を活かして、彼らにそういう「気づき」を与えてあげられるよう、僕らも努力していきたい。

インフォメーション

☆日本漢字能力検定２級の合格率が大幅にアップ

日本漢字能力検定学内団体受検（6月17日実施）結果

受検者285名（2級・準2級合計）

2級合格者98名（合格率39.0%）

※昨年（24.5%）から約15ポイント上昇しました。

また、上位成績者の表彰は以下の通り。

最優秀賞　水野木の実さん（人間情報学部2年）

ほか、優秀賞2名・努力賞4名

☆『中日新聞』に学生の投稿文が掲載されました

三輪雅貴さん（健康医療科学部スポーツ・健康医科学科1年）
「将来見越して大学生活送る」（7月15日朝刊「ヤングアイズ」欄）

見郷彰彦さん（文学部教育学科1年）
「『マナー違反』言う勇気大切」（7月27日朝刊「発言」欄）

☆平成24年度前期「愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞」受賞者決定（主催：図書館、協力：全学日本語教育部門）

応募総数349件の中から、以下の7名が選ばれました。

大賞	該当なし	
準大賞	花井美咲さん	（文学部国文学科1年）
	岡田真奈さん	（文学部教育学科1年）
	黒川　隼さん	（心理学部1年）
	奥村美里さん	（メディアプロデュース学部3年）
佳作	石丸由奈さん	（心理学部1年）
	伊藤駿作さん	（交流文化学部3年）
	浦野那月さん	（文学部国文学科4年）

☆本部門の取り組みが『高校生新聞』で紹介されました

「人間力を磨く『日本語表現』」（『高校生新聞』第196号　2012年6月10日）

編集後記

巻頭特集では、「日本語表現」科目が大学での学修以外の場面でも十分に役立っている様子を紹介しました。その学修内容のひとつに、総論を述べてから各論を述べるという、論理展開の順序があります。実は『@JL』の構成でも、この順序を守っています。「日本語表現」科目は誌面編集にも役立つんですよ！（森本俊之）

発行年月日　2012年9月30日
編集／発行　愛知淑徳大学全学日本語教育部門
〒480-1197 愛知県長久手市片平9
TEL：0561-62-4111（代表）
nihongo@asu.aasa.ac.jp